
私のパズル

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私のパズル

【Zコード】

Z6585H

【作者名】

久芳

【あらすじ】

私はパズルのピースを探していた。自分の名前ですら思い出せないけれど、ピースを集めなければいけないことだけは覚えていた。パズルが完成するにつれ、次第に、自分のことを思い出していく。私は……。

最初のピースは、カラスがくわえていた。

公園で羽を休めているところに近づくと、カラスは私の無言の訴えに気づいたのか、おとなしくピースを解放してくれた。

漆黒の翼をはばたかせて空に戾つてゆく姿を眺めながら、私はコンクリートの上に転がるピースを手にとる。それがパズルのどの部分かはなんとなくわかつても、他にあわせるところがないのではめようがなかつた。

私はピースを手のひらで包み、その冷たさにわけもなく泣きそうになつた。でも涙の流し方ですら忘れていて、ただぼんやりと自分の手を見下ろすしかできなかつた。

今の私にできるのは、パズルを集めること。

自分は何者なのか。今の自分にはそれですらわからなかつた。

ただ頭の中にあるのは、「パズルを集めなきゃ」という思いだけだつた。

自分は何者なのか。名前はなんというのか。どうしてこんなことになつてしまつたのか。教えてくれる人は誰もいなくて、私は自分の本能を信じるしかない。

パズルを集めればわかる。でも、そのピースがどこにあるのか、いつたいいくつあるのか。それもよくわからない。完成図が自分でうまくつかめていないから、頼れるのは本当に、自分の直感だけ

だつた。

私はその第六感を頼りに、公園を出て、民家の間をてくてくと歩いていた。

その道中、見つけたピースはひとつ。今度は猫が持っていた。うかつに近寄れば警戒され逃げられるかと思つたけど、猫もまたカラスのように、私をしげしげと見つめてそつと地面にピースを置いてくれた。

今度のピースは、さつぱりなんの部分かわからなかつた。パズルの一部分だということはわかるけど、どこにはめればいいのかわからない。先ほどカラスからもらつたピースには、絶対につながらない。

どうやら自分は、とても数の多いパズルをつくるつとしているらしい。それに内心うんざりしてピースを握り締め、私は手にした欠片がかすかにふるえていることに気づいた。

ふたつのピースは、お互いに呼び合つてているようだつた。地面にならべると、磁石のようにくつつきはしないものの、目にわかるかわからないが程度の小さな揺れで、共鳴しあつている。

もう一度手のひらに乗せてみると、ピースは他の仲間の気配を感じたようで、行き先を示してかすかに振動していた。私はそれを信じて先をすすんだ。

いくらも歩かないところで、ゴミ収集の看板を見つけた。今日は燃えるゴミの日のようで、はちきれんばかりにぱんぱんになつたゴミ袋が、看板の下にたくさん並んでいる。カラス避けにネットをかぶせているけれど、かしこいカラスはネットの隙間からゴミ袋を引きずり出し、よつてたかつて中身をつつき散らかしていた。

それぞれの家庭で出たゴミの量は多く、道路には風にどばされたティッシュやビニール袋が散乱している。生ゴミの腐つたにおいが鼻をついた。

私がふらふらとゴミの山に近づくと、カラスは逃げるでもなくこちらに視線を向けて、私がひとり入れるスペースをあけてくれた。

ありがとう、とかけた声が聞こえたのかわからないけど、カラスが一羽、かあと鳴いた。

手が汚れるのもかまわず、ゴミを漁り、私はゴミ袋からたくさんピースを見つけた。先ほどのカラスや猫は、ここからピースを見つけてと思って間違いないだろ。こんなものを拾つてどうするのかとも思うけれど、それがヒントでたくさん集められたのだから、私は逆に感謝しなければならなかつた。

カラスたちに混じつて他のゴミ袋も漁り、私はピースを拾つた。あいかわらずどれがどこの中のものはわからないけど、手の平に乗せてみれば、仲間との再会が嬉しいのか共鳴が強くなつていた。

私がここにくるまでに、他のカラスや動物たちがピースを持ち去つてしまつたかもしれない。けれどこれだけ見つけたのは大きな成果で、私はピースが隠される主な場所を知つた気がした。

集めたピースのふるえを頼りに、私はまた他のピースを探す。ピースはまだ形を作るほど集まつていない。このパズルがなにをつくるのかはわかつても、どういう形になるかはわからなかつた。

私が次にたどり着いたのは近所のコンビニエンスストアで。共鳴が強いのは店内ではなく、外に設置されたゴミ箱だった。

カラスと家庭ごみを漁つたときにも思つたけれど、どうも他の人は私が堂々とゴミ箱をひっくり返していくも気にならないらしい。声をかけられることもなければ、視線を感じることもない。なぜか私を見るのはカラスや猫といった動物ばかりだった。

予想通り、ゴミ箱の中の袋から、私はまたピースを見つけた。けれど先ほどよりは多くなく、あいかわらずどこのものかもわからな。ピースが手のひらにおさまらなくなってきたので、私は集めたものを全部ビニール袋に入れて運ぶことにした。

ピースを集め終わると、コンビニを示していたほかのピースはおとなしくなる。そしてしばらく静まつたかと思うと、また新たな仲間の気配を感じて道を示し始める。どうやら店内に興味はないらしい。

せつかく涼めると思つたのに。私はため息をこぼしながらも、ピースにしたがつて足を運んだ。照りつける太陽は容赦なく私をあぶり、アスファルトからはいきががたちのぼつてている。早く集めないと、ピースが氷のように溶けてしまいそうで不安だった。

パズルができなければ、私は何も知らないままよわなければならぬ。道行く人に私は誰ですかと訊いたところで、訊かれた人も困つて『はあ?』としか言えないだろう。

ピースが示す道は先ほどとは違う公園につながつていて、私は木陰でこし休むことにした。喉が渇いても、ジュースを買うお金はない。公園の水のみ場には子供がいて、わたしが近づいても知らんぶりで飲み続けていた。

「コンビニの例にならって公園の「ゴミ箱を探してみたけれど、そこにピースはなかつた。隠すほつも、何度も同じ手を使うわけではないらしい。ピースはいぜん公園の中で共鳴しているけど、この広い中で見つけるのはなかなか至難の業だ。

足が疲れて、私は芝生の上に座り込む。ベンチはサラリーマンが寝ていて座れなかつた。

なぜ自分はこんなことをしているんだらう。

そう思つたところで、答えを知つてるのはパズルのほかにない。集めなければ私はわからないまま。けれど集めるのは難しい。

くじけそうになつて、私は横になつた。

子供たちの遊ぶにぎやかな声がする。サラリーマンのいびきが聞こえる。風にふかれて木々の枝が揺れ、葉っぱが私に降りそそぐ。梢から見上げた空はやけに青かつた。

私が暑さに息をつくと、ピースたちも同じなかじつとりと汗ばんでいた。あまり暑いところには置かないほつがいい気がして、私はなるべく涼しそうなところにピースを隠す。袋を木の根のくぼみに置いて、ふと、視線を背の低い垣根にやつた。

「あ

「ひのうのを、灯台下暗しというのだろうか。ピースは垣根の下にこつそりと隠されていた。木の根で泥まみれになつて、なかば埋められているようだつた。

数はそんなに多くない。けれど、田についたものを拾うとピースは共鳴をやめた。そしてまた、次の場所を示し始める。もう公園に用はないらしい。

袋を抱えて立ち上がり、私は軽いめまいを覚えた。倒れるほどではなくて、膝をつけばすぐにおさまる。日射病にでもなつたのかと思つたけど、どうやらそういうわけでもない。

私はあらためて立ち上がり、公園をぐるりと見まわした。変わつたところは何もない、平凡ですこしだけ緑の多い公園だ。

ここに私は、前も来た気がした。そう思つた自分に自分でおどろ

いた。

やっぱり、と呴いてみる。その声を聞いてくれる人はいなくて、すぐに風にさらわれていく。梢のざわめきのほうが大きかった。ピースを集めると、私は記憶を取り戻していくらしい。これからもっと集めて、パズルを完成させれば、私は自分が何者なのかわかるのだろう。

ピースの共鳴を頼りに公園やコンビニなどをめぐり、私は手持ちの数を増やした。

けれどそれも、あらかた近所を探し回るとぱたりとなくなってしまった。ピースも共鳴をやめ、おとなしく私に抱かれている。パズルのピースなのだから動かないのが当然なんだうけれど、静かにされでは私が困る。

私はとりあえず、手持ちのピースをあわせてみることにした。一定のところに留まつたほうがピースも仲間を探しやすいということを学んでいたので、そのまま道路に座った。

人通りはない。平日の午後だというのに、買い物に出かける主婦の姿ですら見ない。どうもここらへんのアパートに住んでいるのは、家に帰つて寝るだけの労働者や学生ばかりのようだった。

はじめはまつたくわからなかつたピースも、ふたつみつなら合わさるものが出でてきた。ひとつ、大きくパツツができあがつたものもあるけれど、それも単体では意味がない。やはりわけのわからぬいもののほうが多かつた。

あらためてそれを袋に戻していくと、静かだつたピースたちが急にふるえだした。ピースの騒ぎが大きいのは、近くに仲間がいるから。でも、あたりには民家の壁しかない。

ピースの搖れが、他のピースが近づいてくるのを教えてくれる。

でも、まわりに動いているものはない。空に鳥の姿はない。

近づき、近づき、そばに来ると手の中の欠片がさらに強くふるえた。それでもピースの姿はなかつた。

姿の見えないそれは、やがて私から遠ざかっていった。

「……一体、どこに？」

共鳴をやめたピースを手に、私は呆然と呟く。そして、ふと自分の足元を見つめた。

「地下？」

この熱したアスファルトの、下。そこにあるのは、と考えればきっと上下水道。たしかにあの流れの速さから考えればそうかもしないけど、私にコンクリートを突き破つてピースをとりだすなんて荒業はできない。

今ピースはあきらめるしかない。

共鳴をやめたピースが寂しそうで、私はじめんねと呟きながら立ち上がる。どうやらこれ以上ここで待っていても進展はないらしい。ピースが流れてきた道を頼りにすすめば、またなにか手がかりがあるかもしれない。そう、この先には商店街がある。

どうやら私は、こここの地理を知っているらしい。

すこし歩くと、住宅街を抜けて商店街にたどり着いた。さびれがちの商店街は、近所に大きなショッピングセンターができたせいで、かつてあつた賑わいが静まりつつあった。

学生が買い物に行くと安くしたりサービスしてくれたりと、食料品を買うにも外食するにも優しさのあふれた商店街。そこに足を踏み入れると、早速共鳴が始まつてゴミ箱から他のピースたちを見つけた。

それでもだいたい集め終えてしまえば、またピースはぴたりと静かになる。私はなんとかこの状況の打開策を見つけなければ、商店街を歩きながら頭を懸命に働かせた。

私はこの商店街を知っている。この地域になじみがある。じゃあ自分は誰なのか。

ふと、私は電気屋さんのテレビの前で立ち止まつた。

ちょうど、夕方のワイドショーがはじまった時間だつた。画面の

中で、ピンクのカーディガンを着たアナウンサーが淡々と原稿を読み上げている。政治の話、芸能の話。不思議とその情報は私の頭も覚えていた。

『帰宅途中に行方不明になつたミクリヤコイさんですが、いまだに足取りがつかめていません。警察はミクリヤさんがアルバイトに行くと家族に伝えて家を出たことから、家出と事件の両面で捜査を進めています……』

ミクリヤコイ。

画面に映る女子高生の写真を、私はウインンドウにはついてまじまじと見つめた。

行方不明になっているのは私だった。

集めたピースは一コースをきつかけに、私に少しずつ記憶を『え
てくれるようになつた。

ミクリヤコイ。それが私の名前だ。

私は一週間ぐらい前に、バイトに行くために家を出た。行つてき
ますと家族に言つたのは覚えているけど、残念ながらその後の、失
踪したという記憶はまだ戻つていらない。

失踪前の記憶もまだ曖昧で、ぼんやりと霧がかかつて見えないと
ころがたくさんある。わかることといえば、今まで私が歩いてきた
ところは、以前から歩きなれた道だということだつた。

ゴミ箱でピースを拾つたコンビニ。あそこが私のアルバイト先。
高校の同級生や、大学生の先輩たちと仲良くなつて、時給が安いな
がらも毎日一生懸命働いていた。

バイトを通じて友達が増えて、さらに楽しくなつた学校生活。べ
つにクラスでいじめがあつたわけでもないし、バイトに行きたくな
いという理由で失踪するようにも思えない。自分で考えてみても、
私が失踪するような要因は思い当たらない。

私は商店街を去つて、またあてもなくさまよつていた。

ピースの共鳴はすっかりなくなつてしまつていた。ごくまれに騒
ぐこともあるけど、見つけられないことのほうが多くて、そのうち
消えてしまう。一体ピースはどこに隠されているんだら？

ミクリヤコイという私は、普通の女子高生で。特別問題があるわ
けでもなく、じぶんく普通の女子高生で。進路に頭を悩ませテス

の結果に肩を落としながらも、友達と仲良く遊んだりアルバイトにいそしんだりして、青春を謳歌していたはずだ。

歩きに歩いて、大学の近くに来た。来年、私もあの大学を受験する予定だ。バイト先の先輩も、同じ大学に通つて近くのアパートに住んでいた。

「ゴミの収集看板を見つけるなり、再びピースがやかましく騒ぎ始めた。やはりピースは「ゴミの中には隠されていることのほうが多い」。学生ばかりでマナーがなつていないと「収集地区」は、燃える「ゴミ」の回収が終わつても、ゴミ袋がいくつも無造作に捨てられていた。ピースを拾つと、まためまいで目の前が暗くなる。地面に膝をつく私の脳裏に、ひとつ映像が流れた。

部屋の一室、真っ暗なパソコンの画面。フローリングに投げ出された白い脚。

自分の部屋だろうか、と思って、まだそのあたりの記憶がないことを知る。本当にこのパズルは穴だらけで、与えてくれる記憶も断片的でつながりやしない。

集めたピースをまたあわせて、私はようやくひとつ、大きなパズルを完成させた。誰もが目にしたことある、身近なもの。それはわかるけど、はたしてこれは誰のだつたろ？

できあがつたパズルを手にもち、私は首をかしげる。どこかで見たことのある形。

形になつたピースたちは、また私に失踪前のこと教えてくれた。一緒に遊びに行かない？ 新しい映画、面白そうだよね。私を誘つてくれる優しい声。

ケータイのメール。かかる電話。夜遅くなると、送つてくれる人。途切れ途切れに、パズルの欠片はそれを教えてくれる。

「私……」

私は、失踪する前、誰かと約束していた。

そしてその人に、何か言おうとしていたのに。とても大事なことを言つつもりだつたのに。肝心なところをこのピースたちは教えて

くれない。悔しくて唇を噛んだ。

コイちゃん。

突然、パースが大きく振動した。私は驚いて取り落とてしまい、アスファルトの上でパースがふるえている。まるで私になにかを伝えるように、今までにない強い共鳴だった。

集めたピース同士が、強く呼び合っている。

強いめまいがする。部屋の一室、パソコンの画面。投げ出された私の脚、夕暮れの暑い西日。

コイちゃん。私を呼ぶ声。

甘く、囁くような声。ゆいちゃん、ゆいちゃん。耳元で囁かれて、誰かが私に覆いかぶさっている。

『コイちゃんが好きなんだ』

声が蘇る。聞いたことのある声。

私はピースを抱えて立ち上がる。腕の中で、結合したパースが私に教えてくれる。この声は誰のもの。そして私のこと。

「……先輩だ」

「ンビーの、先輩。よく同じシフトにはいる、大学に通う先輩。やさしくて、頼りがいがあって、いろんなことを教えてくれる先輩。映画に行こう。ご飯を食べに行こう。勉強がわからないところは教えてあげるよ。

コイちゃんのことが好きだ。

「先輩……」

彼が一人で住むアパートは、大学の近く。この近所。はたして場所はどこだつただろう。

頼りない私を叱責するよつて、ピースが強くふるえる。道を教えてあげると、他のピースを探すときのように、腕の中のふるえが私の行く道を教えてくれる。

私の行きたい道と、ピースが教えてくれる道は一緒なんだ。この先に、ピースがあつて、そして私の知りたいことがある。

私はなぜ失踪したのか。

誰かに 先輩に、はたして私は何を伝えたかったのか。

たどり着くまでの道。ピースを見つけた。

側溝のどぶをさらうと出てきた。人の家の庭にも埋まっていた。まるでヘンゼルとグレーテル。転々と隠されたピースが、行く道を教えてくれる。

ユイちゃん、と私を呼ぶ声。甘く、粘つく声。それを聞いて、私は一体何を思つていたのだろう。

一番大事なピースがない。だから思い出せない。こまごまとしたピースに隠された記憶も必要だけど、幼いころの思い出なんてあとでもいい。今は、私の手がかりを集めなければならない。

核がないといけない。多くを知つているピースがないと意味がない。

共鳴を続けるピースに導かれながら、私は一步一歩、先輩の家へと近づいてゆく。家に彼がいるかなんてわからない。でも今は、行くしかない。

アルバイトに行つてくるね。家族にそう告げた私。いつもならまつすぐ行くはずなのに、その日にかぎつて違う道をすすんだ。

半そでのコニフォームは店についてから着る。ミクリヤと名前のついた私のネームが、カバンの中でケータイとぶつかってかちかちと音をたてる。

その日で、私はバイトを辞めるつもりだった。それはどうして。そのピースはまだ私の手元にない。

ぐいぐいと身体をひっぱるピースの共鳴が弱まって、私は目的のアパートを見上げた。錆びついた自転車がいくつもとめられた砂利道。乱暴に停められた車。大学生の集まるアパートなんてどこもこんな感じだ。

先輩の部屋は一階。私は塗装の剥げた階段を上る。導かれるまま、部屋にたどり着く。

チャイムは鳴らさなかつた。鍵がかかってるのも気にしなかつた。私は部屋に入り、玄関にちらばつた靴を踏んで短い廊下を渡つた。ワンルームの小さな部屋。フローリングの上に寝転がる先輩の足がちらりと見える。

西口が差して、暑くなつた室内。開け放たれたベランダの窓。パソコンの画面が、暗いまま室内でたたずんでいる。

私の腕から、袋からあふれて抱えきれなくなつたピースがこぼれおちる。その、どしゃ、という音に気づいて先輩はこちらを向いた。

「 ひツ」

短く吸つた呼氣が声帯をふるわせたらしい。先輩が私を見て目を丸くしていた。 そうか、先輩には私のことが見えるらしい。

声をあげることもできずに硬直する先輩を尻目に、私は背を向けて台所に向かつ。この部屋はピースに満ちていて、互いが呼び合つ共鳴で部屋全体が振動しているようだつた。

私は冷蔵庫の前で膝をつく。そしてためらいもなく開けた。先輩がやめると言おうとしたらしいひきつった声だけが、静まり返つた室内でやけに響いた。

中を見て、私はやはりと呟いた。

食料が少なく、みはらしのいい仕切り板の上に、行儀よく鎮座し

ているピース。私の記憶に欠かせない、核ともいえる大事な欠片。それは私のミクリヤユイの、切断された生首だった。

「やめてくれ……」

先輩のかすれた声が聞こえた。けれど私は気にせず、冷蔵庫に手をつつこんで私の首を手にとった。

冷たい。そして、重い。きんきんに冷えたスイカを持っているような感じだった。けれどそのスイカには耳があり、鼻があり、髪がある。閉ざされたまぶたや鼻から流れた血は乾いてこびりつき、青ざめた顔を汚している。保存状態がよかつたのか、他のパートのようにはりかけてはいなかつた。

私の膝に乗った袋から、ピースたちがこぼれしていく。それは、細切れにされたミクリヤユイの身体。カラスや猫がくわえていたのは指先や手首の一部で、集めたピースでかるりじて手首と思われるものを作ることができた。

集めたピースのほんの一部分で、ビニのものかもわからない肉片や臓物のほうが圧倒的に多い。燃える「ノリ」として処分されようとしていた生ゴミたちは、腐りかけたものが多く、半ば溶け出しているものもあつた。それがフローリングの上にベチャベチャと落ちて、ひどい臭いが鼻をつく。

むき出しになつた骨が、床に落ちるときにつりんと音をたてた。私は気にせず、核のピースを食い入るように見つめていた。

そうか、だから私のことが誰も見えなかつたんだ。

耳たぶにふれた指先から、生首が持つ記憶が伝わつてくる。触れた指先はこの上なく熱く、大量に押し寄せてくる情報にめまいがする。それでも取り落とすまいと、私はしつかりとピースを抱きしめ

た。

ピースが 私の首が教えてくれる。私がこうなる前のことを。

私がどうしてこうなつてしまつたかを。

私はアルバイトを辞めるつもりだつた。バイトは好きだつたけど、続けることが精神的に苦痛だつたからだ。

『ユイちゃん』

そう私は甘い声で囁く先輩。私は彼と恋人同士でもなんでもなかつた。

先輩から一方的に言い寄られていた。しつこくメールが来て、電話が何度も鳴つて、家の前で待ち伏せされた。同じシフトにばかりはいつて、しつこく遊びに誘われた。無理やりキスされそうになつたことだつてある。

たえられなくなつて、私はバイトを辞め、先輩との接点を断つことにした。でもバイトを辞めたところで先輩がおとなしくなるとも思えず、きつぱりと言う事に決めた。

けれど、一人で乗り込んだのはさすがにばかだつた。

『ユイちゃんは僕のものだ!』

もともとストーカーの気があつた人だ。私はあつという間に部屋に連れ込まれ、襲われそうになり、押し倒されて頭をしこたまどこかに打ちつけた。

どこに打つたのかはさっぱりわからない。私はそれで死んでしまつたのだから。

先輩は私が死んだことで我に返つたらしく、罪に問わされることを恐れて死体をどうするか考えた。

そして作り出したのが、私のパズルだ。

つい先日まで一緒に働いていた女の子の身体を切り刻み、こま切れにしてゴミと一緒に捨てた。人の身体なんてわからないぐらいばらばらにして、私は生ゴミになつた。

捨てられるごみにも限度があつたのか、トイレに流したりもした。今も私のピースたちは、地下を流れ続けているのだろう。きっと力

ラスのお腹の中にだつて いるに違いない。

すこしずつ時間をかけて解体して、すこしずつ処分した。私は死

んだ瞬間、想い人から、処分に困つたゴミになつたようだつた。

そして最後に残つた私のピース 首だけが、処分に困つて部屋に残されていた。

私が死の間際に見たものは、先輩に押し倒され、頭を打ちつける寸前の、自分の投げ出された脚だつた。

「……先輩」

めまいのおちついた私が発した声は、生前出したことがないだらうと思われるほどに低く、ぞつとした声だつた。

「私の身体は、どこ……？」

首から流れる血ですらなくなつた自分の顔を抱き、私は腰を抜かして動けない先輩を振り向く。肩越しに振り返つたはずなのに、視界を邪魔するはずの肩は透き通つてふるえる先輩の膝を見せていた。私は幽霊だつた。

集めていたのは自分の体だつた。

できあがるはずの私の死体は、もう、散り散りになつてしまつて完成しない。

「ねえ、先輩？」

立ち上がると、膝の上に残つていたピースが散らばり、体液が流れ出た。皮膚に刻まれた毛穴はわかるけど、やはりどの部分の肉かはさっぱりわからなかつた。

end

「ゆいちゃん……」

歩み寄ると、先輩は足が立たないながらも手で這つて逃げようとする。もちろんそんなの無駄な抵抗で、私はあっさりと彼に追いつき、その眼前に生首をつきだしてみせた。

「ゆるしてくれ、ユイちゃん……」

「ゆるす?」

それは、今まで私に付きまとつていたことか。それともうつかり殺してしまったことか。あるいは、私の身体をばらばらにしてしまったことか。

不思議と、自分を殺した人を目の前にしても、憎しみなんて感じなかつた。

パズルは完成しなかつたものの、自分のことを知ることができた。そして事実を知つてしまつた今、私にはもうやるべきことがないようと思われる。

生きていたらあがしたかつた。これがしたかつた。でも、もう遅い。今の私に、できることなんてかぎられる。

恐怖に焦るあまり、手をすべらせ床にはいつくばる先輩。私はただ、それをだまつて見ていた。哀れみとか、そういうものを感じるわけでもない。ただ、見つめても彼に対する思いは無だつた。それは生前となんら変わりなかつた。

ひいひいとなさけない泣き顔で許しを請う先輩の前に、私は自分の首を置く。パズルはもう完成しない。ならばもう、このピースに用はない。私はここを去ることにした。

玄関の戸が開く音がする。

私はミクリヤコイの失踪が、ようやく解決することを悟つた。

行方不明になつていたミクリヤコイさんの遺体が、同じアル

バイト先の男子大学生のアパートで発見されました。警察はミクリヤさんがこの大学生にしてつこく言い寄られていたことから捜査し、自宅でミクリヤさんの切断された頭部を発見。十九歳の少年を逮捕しました。その後の調べにより、少年は殺害したミクリヤさんの遺体を細かく切断し、生ごみとして捨てたほか、トイレに流すなどして処分したと供述。警察は押収した配管を調べるなどして、ミクリヤさんの遺体を捜索中です。……』

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6585h/>

私のパズル

2010年10月10日17時41分発行